

石皿・磨石・石臼・石杵・磨臼(Ⅲ)

藤 本 強

1

筆者は本紀要2号、3号に石皿・磨石・石臼・石杵・磨臼(Ⅰ)、(Ⅱ)を連載してきた(藤本1983・1984)。前者では、旧石器時代にさかのぼる例と中国の早期新石器時代の例をみたし、後者では南部レヴァント地域の例をみてきた。本論文は近年調査の進展がめざましい北部レヴァントの例をみることにする。

北部レヴァントはレバノンの海岸地帯を除き、きわめて限られた調査例しかなく、シリアの内陸地域は辺境地帯と考えられていた。1970年代になり、ユウフラテス・ダム(アッサード湖)の調査が一つのキッカケとなり、北部シリアを中心として多くの調査がなされ、ここで採集狩猟経済から、生産経済への具体的な歩みを実証的にとらえられる見通しがえられるようになってきた。さらに従来やはり調査例が乏しく、空白地帯であったダマスクス盆地内でも、限られた数ではあるが、調査がなされ、ここでも人類の農耕化、定住化への歩みが具体的に把握されはじめている。

さらにシリア砂漠内においても調査がされており、ここでもまだ散発的ではあるが、やはり各種の遺跡が発見されている。また北部シリアのバリフ川流域(Copeland 1979)、クウェイク川流域(Copeland 1981)でも一般調査を中心にした調査がなされており、つぎつぎに新しい発見がなされている。

一つには、イラク・イラン戦争によって、そこをフィールドとしていた調査団がシリア北部に入ってきたこと、またレバノンを中心に動いていた調査団がシリア北部に入ってきたという傾向もあるが、やはりアッサード湖の建設に伴って発見された Abu Hureyra, Mureybet という遺跡が農耕化、定住化を具体的な資料によって、明らかにできるという見通しをもたせたことおよび従来の調査の中心地であったレヴァント海岸地域と北部メソポタミアのちょうど中間にあるのがこの地域であることがこの調査を盛んにさせている最大の原因であろう。

南部レヴァントのパレスティナを中心にして、かなりはっきりとした様相がつかめたかにみえていた農耕化への歩みも、この地域で農耕が主な生業になると考えられる PPNB の起源の問題がはっきりせず、南部レヴァントの PPNA と PPNB との間には、大きな断絶があることがしだいはっきりしてきた。これは製粉具の分析をとおしてもいえることであり(藤本1984)、PPNB の起

源を探ることが一つの重要な課題となっていた。おそらく北からとは考えられてはいたが、それがどこなのか具体的な資料に欠けていた。

新しいタイプの石鏃、新しいタイプの鎌刃、新しいタイプの製粉具、四角い多くの部屋をもつ住居、さらに新しいタイプの石核、急速に増加する栽培化された麦類を中心にした穀物、野性のガゼルから家畜化されたヒツジ、ヤギへの転換、上記のような要素をもった PPNB が南レヴァントには突如出現し、生活圏も広く拡大する。こうした要素は従来の南レヴァントには全くたどることができない。どこかに故地がある筈である。というのが1970年代前半までの情勢であった。そこにアッサード湖の建設に伴う事前調査として実施された Abu Hureyra および Mureybet の調査によって、特に Mureybet の調査によって、これらの問題が一挙に解明できそうになってきた。また南部レヴァントとユーフラテス川中流域を結ぶ位置にあるダマスクス盆地においても、そうした状況が明確になってきた。

今日の人類の文明を支える基礎になっている穀物農耕への最初期の段階が遺構、遺物という生の資料を通して明らかになってきた。これは注目を集めざるを得ないであろう。特にその拠点になったと考えられる大規模な集落が調査され、その周辺には、ほぼ同時期のやや小規模なものもあるという形で発見されている。農耕の起源が考古学的に求められはじめて30年余にして、ようやくその一端が明らかになったといってもよからう。しかしこれらの遺跡は水没してしまっている。その周辺で調査という形になるのはむしろ当然かもしれない。

また、ユーフラテス川中流域というのは、従来の調査がもっとも集中的に行われていたレヴァントの海岸地域とメソポタミア平原をめぐる地域との中間の位置にあり、地中海岸からメソポタミアに達する自然の交通路にもあたっている。またアナトリア高原からもユーフラテス本流を初めとして、ユーフラテス川の多くの支流がくだってきているところでもある。メソポタミア平原、地中海岸、アナトリア高原を結ぶ交通の要衝にもあたっている。種々の要素がここから出ていき、また入ってきている。

特に現在問題にしている時期の交易関係を示す黒耀石の原産地を通した分析 (Renfrew・Dixon・Cann 1966, 1968) によって、遺跡ごとにアナトリア高原の産地を異にしたものを手に入れた可能性がでてきている。これは遺跡毎に交易関係および交易路をもっていたことを示しているように思われる。

このように現在問題になっている数々のものの解明の鍵をユーフラテス中流域は握っていることになる。従ってここに調査団が集ることになるのであろう。今後これらによって、もたらされる調査成果が期待される。

これまで種々の角度から農耕の起源に関する仮説が述べられてきている。また西アジアの麦類を中心にした農耕、ヒツジ、ヤギを中心にした牧畜に関しても多くの仮説がだされている。これらはユーフラテス川中流域の考古学的調査の進展によって、根本的にみなおしを迫られよう。西アジアのなかにおいても、農耕は一地域で開始されたのではないことがしだいに明らかになってきている

し、さらにそれが農耕社会の成立ということになると、そこに至る間には、数多くの紆余曲折がそれぞれの地域であったようであり、自然環境の推移、それに対する人間の側の各種の対応、さらには小規模ではあるが、人間の自然への働きかけの結果生じる各種の影響、こうしたものなどがきわめて複雑にからみあっており、直線的に農耕社会に達する地域があったかどうか、また西アジアのなかにおいても、一般的な農耕社会への法則があるかどうかきわめて疑問である。それぞれの地域のそれぞれの時点での対応がその農耕社会を生み出したというのが実際の様相ではなかったかと思われる。しかし、ほぼ時を同じくして、アナトリア高原、メソポタミア平原周辺、ユーフラテス川中流域に農耕社会が出現している。こうした農耕の出現および農耕社会の出現が必然であるというのが、これまでの仮説のどれをとってもいわれていることであった。これはほぼ同時に出現するというのが一つの大きな論拠であったものである。

時を同じくする出現が一つの論拠になりうるであろうか。そこにはすでに黒曜石に典型的にみられるように広域に交易のネットワークができあがっていた。黒曜石だけでなく、特殊な用途のものに使われる石器は広い地域にわたって、同じものが同じ石材によって作られることが認められている。また黒曜石の産地分析からも判るように、特定の遺跡と産地を結ぶ交易路がそれぞれに確立していた可能性が強い。拠点集落を結ぶ交通路、拠点集落と原材原産地を結ぶ交通路、拠点集落と派生集落を結ぶ交通路がそれぞれ確立していたとみて、大きな誤りはないであろう。ものの流れがあるということは人の流れがあることである。

とすれば、ものだけでなく、考え方、生活上の種々の方法などもきわめて速かに伝達された可能性が強い。少なくとも PPNB よりあとの時期においてはこうした可能性はきわめて強い。一度どこかで得られた知識あるいは確立された方法はきわめて早く西アジア全域に広まることになるだろう。少なくともこの頃の考古学的資料から得られる時間のモノサシの一目盛の範囲においては、ほぼ同時と考えられる範囲で全域に広まる可能性はきわめて強い。こうしたことが広域に同時にということをもたらしているのであろう。

このような観点においても交通の要衝にあたり、しかもアナトリア高原、メソポタミア平原周辺、レヴァントをつなぐ位置にあるユーフラテス川中流域の調査はきわめて重要な位置を占めている。

このように人類史のなかにおいてもっとも重要な鍵を握っているユーフラテス川中流域であるが、調査が本格的になったのはここ15年ほどのことであり、その調査内容は予報あるいは数多く開かれているシンポジウムの報告から知ることができるだけであり、詳細な内容を知ることにはできない。

石皿・磨石・石臼・石杵・磨臼についても、ほとんど触れられていないものもあり、僅かに1～2行あるということが述べられているだけの報告が多い。図にいたってはほとんどない。石鏃、鎌刃をはじめとする打製石器についてはかなり詳しい記述があるが、製粉具に関しては記述はきわめて少ない。どこまで正確に記載できるかどうか不安ではあるが、大勢は把握できよう。

北レヴァントと南レヴァントの編年の対応関係については種々のものがだされている (Moore 1978, 1982, Cauvin 1977, Aurenche・Cauvin・Cauvin・Copeland・Hours・Sanlaville 1981,

Cauvin 1983, Bar-Yosef 1981など)。大枠においては一致してきている。石鏃のタイプを主にし、それにC14年代をからめての編年である。北レヴァントを中心にした研究者間と南レヴァントを中心とした研究者間に若干のニュアンスの差がみられる。その最大のものは南レヴァントの PPNA と PPNB の間にどのくらいの期間の断絶を認めるかという点であろう。

南レヴァントを主な調査域にしている研究者はこれを短くみる傾向にあり、北レヴァントを主な調査地域にしている研究者はこれを比較的長期間みるという傾向がある。確かに北レヴァントでは、Mureybet や Tell Aswad で Natufian 的な様相からしだいに脱脚し、PPNB 的様相へ変化していくことが認められる。これは石器組成、石器の器種、住居の形態、住居の構造、集落の規模、集落の構造、動物の種構成、植物の種類および比率などの各種のものについて認められる。ところが南レヴァントでは、Natufian から PPNA までの間はスムーズな変化が認められるが、それ以後には大きな断絶がある。少なくとも拠点集落と考えられる Jericho では、明確な断絶がある。この断絶をどのくらいの長さに見るかで意見はわかれることになる。

南部レヴァントでは、PPNA をもって居住が終了するもしくは中断する集落は数多い。また PPNB から居住が開始される集落も多い。もっとも北レヴァントにおいてもこの傾向は認められる。生業の変化を示しているのであろう。

2

先 Natufian 段階のものについてはすでに述べているので(藤本 1984)、省略するが、山麓地帯を除くと、ここでは遺跡数そのものがきわめて少ない。特に後期旧石器時代に当たる時期の遺跡がレバノン山脈、アンティ・レバノン山脈の山麓地帯を除くとほとんどみられないのが一つの特徴であろう。後期旧石器時代の末葉から終末期旧石器時代にかけて若干みられるようになるが、その数は少ない。パルミラ盆地、el Kowm 付近、ユーフラテス川中流域を通してこの傾向はみられる。これは単に調査がまだ少ないというだけの理由ではないようである。バリフ川流域でもこの傾向は認められるようである(Copeland 1979)。後期旧石器時代には、乾燥化が激しいのが通例であったようであり、レヴァントのなかでは乾燥化のいちじるしい地域であるこのような地域には、本来ほとんど居住がなされていなかったと考えることができよう。

終末期旧石器時代に入っても、この傾向は続いている。Kebaran, Geometric Kebaran 段階で10前後、Natufian 段階で15前後のものしか確認されていない。これらのなかには、石器が数点というようなものも入っており、きわめて少ない。南レヴァントと比べると大きな差である。同じような砂漠地帯・ステップ地帯でありながら、シナイ・ネゲヴにはかなりの数の遺跡がみられるのに対し、北レヴァントではきわめて限られた数の遺跡しかない。しかもそのほとんどはレバノン、アンティ・レバノンの山麓地帯のものであり、それ以外のものはなお数が少ない。

製粉具と考えられるものが出土しているのはさらに数が少ない。あるいは触れられていないのかもしれないが、報告されている例はきわめて少数である。Kebaran, Geometric Kebaran 段階につ

いてはすでに触れているので、Natufian 段階からみることにする。

Natufian 段階

Mureybet (van Loon 1966・1968, Cauvin 1972, 1974, 1977) ユーフラテス川に面した遺跡で、低いテルになっている。Natufian 段階から PPNA 段階さらに PPNB 段階まで連続した居住の認められるレヴァント唯一の遺跡である。しかも種々の面でそれらが連続して、ゆるやかに変遷しており、農耕の起源を探る鍵になっている遺跡である。

Cauvin によって、I A, I B, II, III A, III B, IV A, IV B にわけられている。I A 層は Natufian の層であり、I B 層は Epi-Natufian とされている層である。II 層は van Loon による I～VIII 層と対応し、細石器がほとんどみられなくなる。III 層ですべての様相が大きく変化する。これがもっとも問題の層である。van Loon の X～XVII 層にあたる。石器の面でも大きく様相が変わる。細石器は全くみられなくなるし、この後レヴァントの石刃製作の中心となる対面する 2 打面をもついわゆる naviform 形の石核が初めてみられるようになる。石鏃も抉入部をもつ石鏃から茎のある石鏃にしだいに変わっていく。本格的な磨製石斧も初めて出現する。製粉具の様相も大きく変化する。量も従来と比べものにならないくらい多くなるし、新しいタイプの製粉具が登場している。

このような石器の面における変化とともに、住居にも新しい様相が出現する。Natufian 以来の伝統であった単室の円形の住居が一般的なものであるが、これに加えて多室の隅丸方形の住居が出現する。このあとの伝統になる多室の長方形の住居と従来の円形の住居をつなぐものと考えられよう。形態も中間的であり、また従来の様相のなかに新しくつけ加わるという形で、出現のしかたも連続的である。

Mureybet のこうした種々の面における状況は Natufian 的なものがしだいに少なくなり、それ以後の伝統の基礎となる PPNB の様相がしだいに濃くなっていくというものである。このような変化は I A 層から I B 層、II 層、III 層と徐々に進行していく。たとえば狩猟具と考えられるものでは、I A 層では Lunate のみがみられ、I B 層ではこれに抉入部をもった石鏃が加わる。II 層では Lunate がなくなり、III 層では抉入部をもつ石鏃から茎のある石鏃にかわる。他の主要な石器である鎌刃でも、原材として細石刃を利用する Natufian の鎌刃から、中型の石刃を利用する PPNB 以後のこの地の伝統となる鎌刃にしだいに変わる。こうした石器の加工においても、急傾斜の二次加工から、平らな石器全面に及ぶ二次加工へと変化している。

すべてが Natufian 的なものから、このあとのレヴァントの伝統の基礎を確立すると考えられる PPNB の様相へしだいに移行する。このような移行的、過渡的な様相がもっとも集中的にみられるのが、Mureybet の III 層である。もっとも重要な、鍵を握っている層ということができよう。この時期の北レヴァントは遺跡の数が非常に少ない時期であり、ユーフラテス川中流域では、僅かに Mureybet と Cheikh Hassan が現在では確認されているにすぎない。北レヴァント全域でも、ほかにかなりの規模をもっているのは、Mureybet III 層の後半に比定することができると考

えられるダマスクス盆地の Tell Aswad の I A 層があるだけである。今後の調査の進展によっては、いくつかの遺跡がつけ加えられる可能性があるが、多くの遺跡が加わる可能性はほとんどないとみてよからう。南レヴァントでも PPNA の時期の遺跡の数はきわめて少ないが、北レヴァントほどではない。しかし、拠点的な集落ということになるとその数はきわめて少なくなる。また南・北レヴァントに共通してみられることであるが、海岸地帯でいちじるしく遺跡が減少し、ほとんどみられなくなるのもこの時期の一つの特徴である。内陸の河川もしくは湖沼のすぐ近くの台地上というのが共通してみられる立地ということができよう。

Mureybet の IV 層は PPNB 的様相を示す層である。このあと南北レヴァントの伝統の基調をなすすべての要素がこの層で出現する。Mureybet の III 層で萌芽していた各種の要素がここで確立する。Mureybet の IV 層は最上層であるため、ひどい浸蝕をうけている。Cauvin のもっとも古い報告、van Loon の報告でははっきりした形では述べられていない。

南レヴァントの PPNA と PPNB の断絶の期間をどのくらいにみるかによるが、Mureybet の IV 層¹⁾と同時期の南レヴァントは無人であった可能性が強い。あるいは PPNA 的様相が長く残っていたとも考えられるが、少なくとも Mureybet の IV 層と同時期に南レヴァントで PPNB が広く分布していたとは考えられない。

単にレヴァントのみでなく、人類の食料の一つの中心を担いつづけ今日に至っている麦類の農耕化への歩み、農耕社会への歩みを跡づけてくれる Mureybet の様相の概略をみてきたが、この遺跡における製粉具と考えられるものの変遷はかなり詳細に分析されている (Nierlé 1982)。これを中心にみていくことにする。Mureybet の Natufian 段階のものは I A 層の Natufian とされているものと I B 層の Epi-Natufian とされているものである。

Nierlé は Mureybet からの 71, Cheikh Hassan からの 47 計 118 の製粉具と考えられるものを分析しているが、時期は I・II, III, IV の三時期に区分している。Mureybet の II 層は比較的特徴のない時期で、時期設定も細石器が消えるという消極的なものでなされている。ここでは II 層のものも含めてみることにする。

Mureybet の I 層, II 層には磨石と石皿あるいは石臼がみられる。特徴的なものはなく、いずれも自然のままの円礫にやや手を加えただけのものである。Cauvin の報告 (1977: 21) によれば、I A 層から出土しているのは磨石が 2 点のみであり、きわめて少ない量である。また I~II 層のものがいずれも円礫をほとんど加工しないで使用しているというのが大きな特徴である。Natufian 段階でも、Mallaha のものにみられるように、多彩な加工が施されているものがあるなかで、Mureybet のものはきわめて初現的である。

しかし、ここにみられるものは、Natufian の特徴であった石臼と石杵というセットと異なるものであり、これらはきわめて少ない。図示されているものでみる限り、石臼が 1 点あるのみである。これも通常 Natufian にみられるものとは大きく異っており、Mureybet の I・II 層のものは Natufian の伝統にあるものとはかなり異った様相を示している。

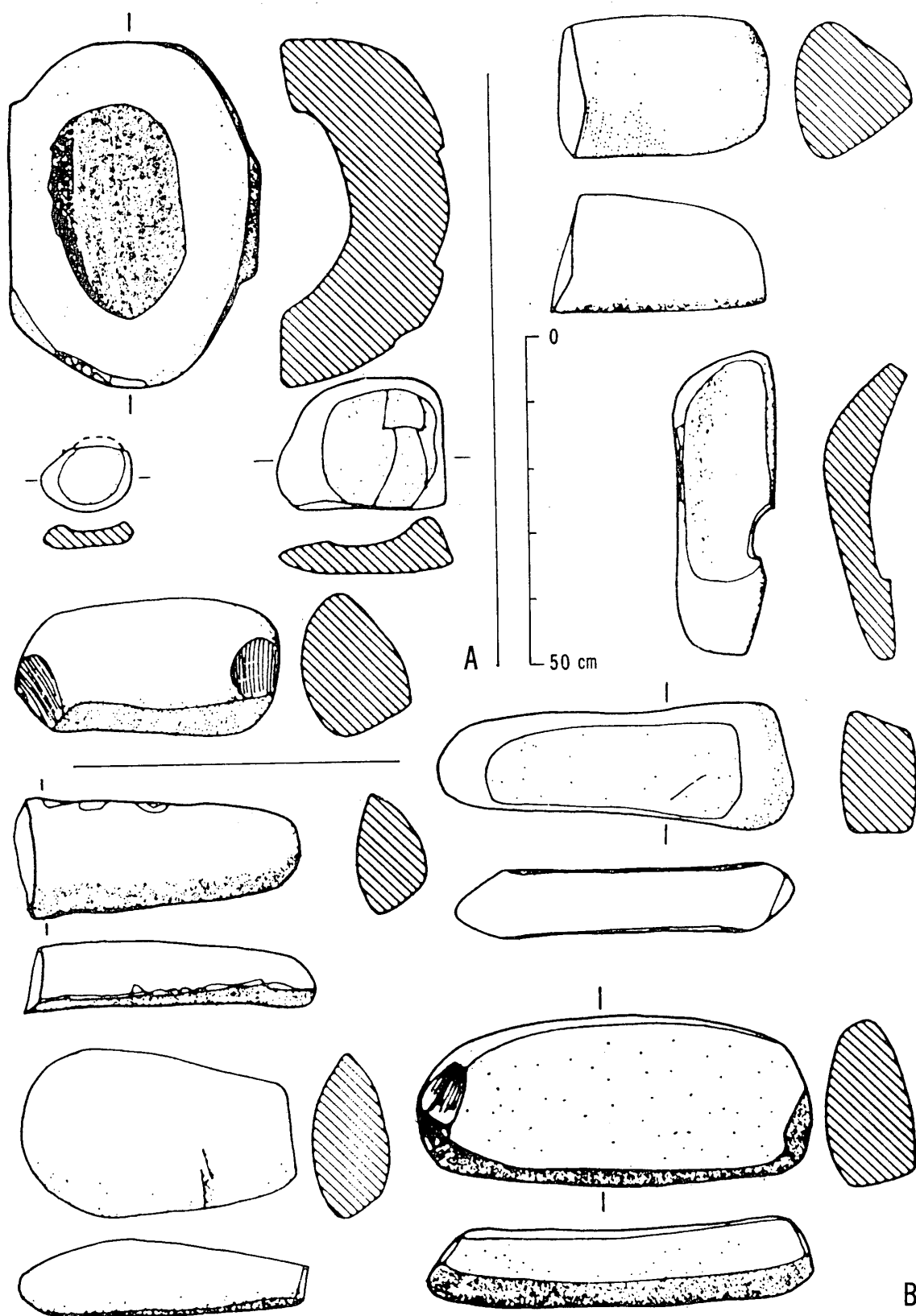


Fig. 1 Grinding-stones from Mureybet (A : Mureybet I, B : Mureybet II), (Nierlé 1982)

Abu Hureyra (Moore・Hillman・Legge 1975, Moore 1975・1978) やはりユーフラテス川中流域にある遺跡であり、現在はユーフラテス川の南約 1 km のところに位置しているが、ユーフラテス川の旧河床はテルのすぐ西にあり、おそらく遺跡が使われていた時期にはここに川があったものと考えられる。

テルは比較的低い。ここでは Natufian の層と PPNB に比定される層および土器を伴う新石器文化層が発見されている。Natufian の層と PPNB 層との間は無住であり、ここに大きな断絶がある。PPNB 層は二つに分かれている。Mureybet とは距離もさほど遠くはなく、相互に欠をうめる関係にある。

Abu Hureyra では、PPNB を通して居住があり、さらに土器を伴う新石器文化の初頭の時期まで連続した居住が認められる。ここには、Mureybet にある PPNA 段階の居住は認められないが、Mureybet では前半でとだえてしまう PPNB がほぼ全期間にわたってみられ、さらに土器を伴う新石器文化にまで続くという連続性がみられる。

Natufian の層は幾何学形細石器が主体である。製粉具と考えられるものはきわめて少数という記述しかない。遺構に関する項で、ピットの性格を記述するのに際し、石皿、磨石、石杵、石臼がピットのなかにあることから、居住の場もしくは仕事の場と推定していること (1975: 56) と遺物の記載のなかで、粗い作りの石の鉢が少数あることと若干の加工のある円礫がかなりみられる (1975: 58) とされていることである。遺物の記載には、石皿などのことは全く出てこない。あるいは若干の加工のある円礫に含まれているのかもしれないが、詳細は不明である。しいて考えれば、Mureybet と同じようにほとんど加工のない円礫がこうした道具に使われていたとする推定もなりたとう。しかし、ここにも Natufian の伝統にあるような石臼と石杵というセットは大量にはないようである。

ユーフラテス川中流域には、他に Nahr el Homr があるが、これはおそらく Kebaran の範囲に入るものであろう (Roodenberg 1976)。これを Natufian のものとする考えもあるが、きわめて問題であろう。ここからは製粉具と考えられるものは出土していないようである。

シリア砂漠のなかの el Kowm 付近には、近年の調査によって、終末期旧石器時代に属する遺跡が発見されている (Cauvin・Cauvin・Stordeur 1979, Cauvin M.C. 1981 など)。このなかには Natufian と考えられる遺跡がみられるが、製粉具と考えられるものは出土していないようである。

やはりシリア砂漠のなかのバルミラ周辺でも後期旧石器時代末葉から終末期旧石器時代にかけての遺跡がみられるが (Fujimoto 1979a・b), Natufian に属すものは未発見である。今後の調査の進展によっては、まだ多くのこの時期の遺跡がシリア砂漠内から発見される可能性は大きい。こうした調査がなされて、初めてネゲヴやシナイの南レヴァントの砂漠地帯と対比することができよう。

しかし、こうした遺跡が発見されたとしても、おそらく製粉具を多量にもつ遺跡が発見される可能性はほとんどないと思われる。砂漠地帯ではこうしたものは発見されないであろう。

レバノン山脈、アンティ・レバノン山脈の山麓地帯の Jabrud, Jiita などの諸遺跡からは全く出

石皿・磨石・石臼・石杵・磨臼（Ⅲ）

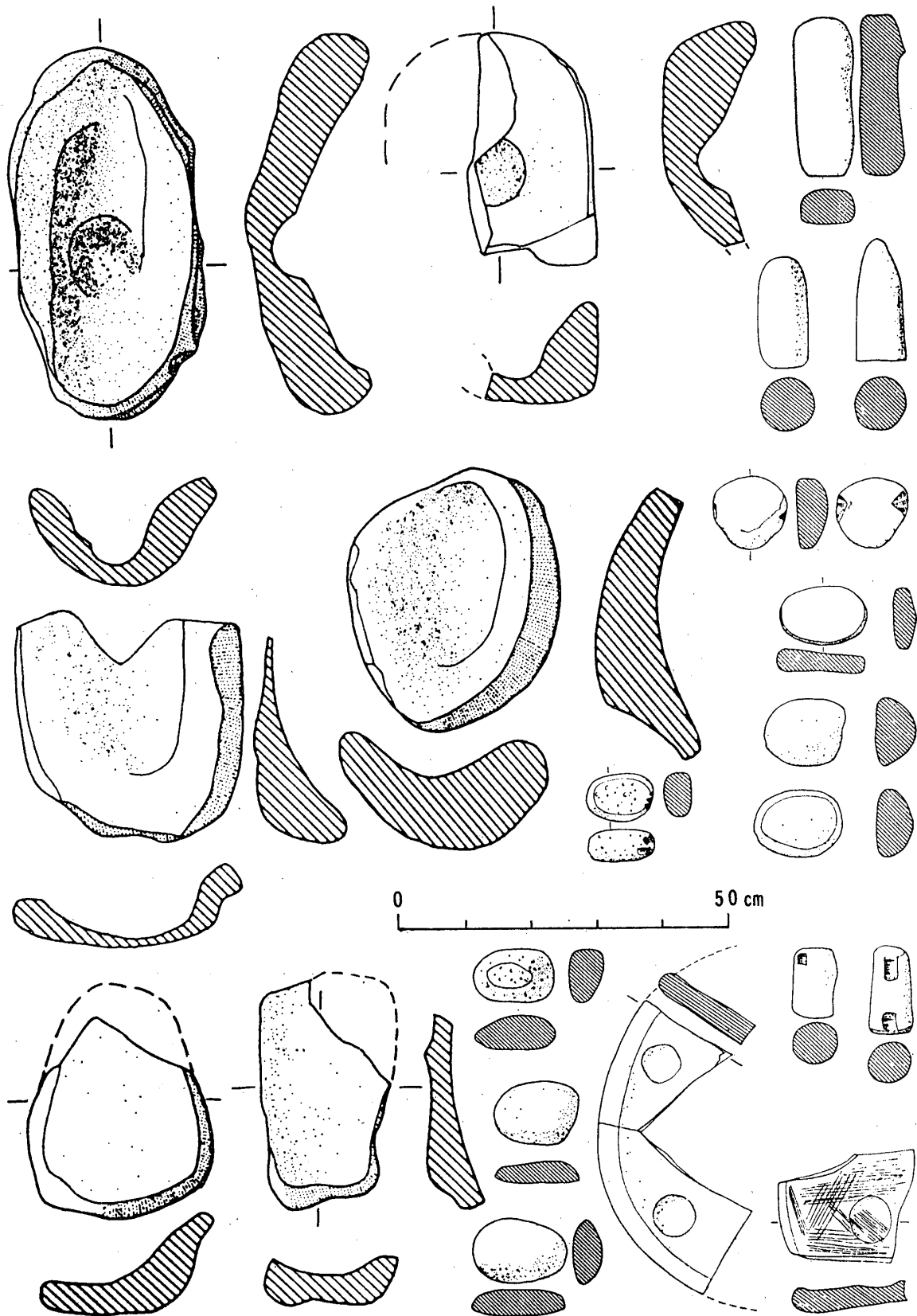


Fig. 2 Grinding-stones from Mureybet III and Cheikh Hassan III (Nierlé 1982)

土が伝えられていない。

北レヴァントの Natufian に平行する時期の Mureybet, Abu Hureyra の両遺跡からは製粉具と考えられるものが若干出土しているようであるが、量も少なく、また南レヴァントの Natufian の諸遺跡から出土するものとは若干様相を異にしている。

Mureybet からの出土が石皿と磨石であり、しかも比較的大型のものがみられることはこのあとの展開のことを考えると興味深い。

PPNA 段階 (Mureybet III)

先にも触れたようにもっとも問題のある段階である。しかし、遺跡はきわめて少ない。また記載はさらに少ない。Nierlé 1982が唯一の数多くの記載のある文献である。

Mureybet (Nierlé 1982) Natufian の項でみた遺跡である。再三述べているように種々の面で移行期・過渡期の様相を呈している。製粉具の面でも同様のことがいえる。まず製粉具と考えられるものが飛躍的に増大することをあげねばならない。また石皿・石臼をとっても、磨石・石杵をとっても、大きさのバラツキがきわめて小さくなってきていて、規格性が生じてきている。またこの時期になり、石杵, cup-hole, 「石皿・石臼」がみられるようになる。前代の特徴である円礫をそのまま利用する石皿も引き続いてみられるし、磨石には加工のほとんどないものもあるが、I・IIの時期に比べると整ったものになり、しかも非常によく使われており、使用によってしだいに整えられたとも考えられる形をしている。

旧来の様相のなかに新しいものがみられるようになるというのがこの時期の特徴である。石杵, cup-hole は Natufian にみられる要素であり、cup-hole は南レヴァントの PPNA 段階を特徴づける石器である。それがここにもみられるのはきわめて興味深い。南レヴァントのものとは若干様相を異にしている。北レヴァントのものというより、Mureybet のものは仕上げがはるかに入念である。北レヴァントのものは仕上げが雑であるのが通例であるのに、cup-hole に関しては仕上げがすこぶるいいである。Mureybet ではIIIの時期にのみみられるものであり、Cheikh Hassan には全くみられないようである。南レヴァントとは違った用途があったのであろうか。

「石皿・石臼」がこの時期のもっとも特徴的なものである。数もかなりみられ、石皿としても、石臼としてもかなり使いこまれているようである。石杵はこれと対応するものであろうか。

さらに PPNB で非常に特徴的である開口部をもつ石皿が Mureybet ではIII Bに現れる。これは数も限られており、正に初現的なものである。

このように Mureybet のIIIでは、従来のものに加えて、新しい要素が数多く現われる。形態は必ずしも整ったものではないが、新しい要素が、しかもそのうちの一部は PPNB 以後の伝統としてレヴァント全体に広くみられるようになるものである。

Cheikh Hassan (Cauvin 1980) やはりユーフラテス川中流の遺跡で、川のすぐ近くにある。詳細は未刊であり、遺跡の詳細な状態は不明である。ここでも数多くの製粉具が出土している (Nierlé

1982)。Nierlé の報文にあるのはⅢAとⅢBのみである。47の製粉具があり、いずれも Mureybet Ⅲと平行の時期にあたるとされている。

様相は Mureybet Ⅲと酷似している。磨石、石杵、「石皿・石臼」、石皿がみられる。川原石をあまり加工せずに使用しているものが多い。ここでは Mureybet よりも早く、開口部のある石皿がⅢA段階で出現している。より古く、PPNB 以後の伝統になる開口部のある石皿が出現しているのはきわめて興味深いことである。円礫をあまり加工せずに使用している磨石、石皿もかなりみられるなかで、こうしたこれ以後の伝統の基となるものが、しかもあまり整ったものではなく、きわめて初現的形態で出現しているのはきわめて興味深いことである。

ユーフラテス川中流域のこの時期の製粉具の様相は正に移行期・過渡期のものである。PPNB の製粉具の主流となる開口部のある石皿がきわめて初現的形態で従来のもののなかに現れる。これは Mureybet もしくはその周辺の地域でこうした石皿が開発され、使用されたとみるのが妥当であろう。それには製粉具をそれだけ必要とし、またしかも多量に必要とする社会の要請があったと考えるのが妥当であろう。麦類を中心とした農耕がある段階に達し、それを製粉するための道具が、しかも効率よく製粉する道具が必要になってきたのであろう。こうしたユーフラテス川中流域の先進地域でこうした新しい試みがつぎつぎになされ、そのうちの効率のよいものが、その後にも残り、それが広くレヴァント中に拡散することになったものと考えるのが妥当であろう。

Tell Aswad (de Contenson 1972・1973・1976・1977~78, Cauvin, M. C. 1974, de Contenson・Cauvin・van Zeist・Bakker-Heeres・Leroi-Gourhan 1979) ダマスクス盆地で唯一のこの時期の遺跡であり、バラダ川が流れこむ湖沼地帯近くにあったものと考えられている。現在は平原のなかにあるテルであるが、当時は湖の近くに位置していたものと考えられている。

ⅠA・ⅠB・Ⅱと分期されているが、ⅠA層が Mureybet Ⅲの後半と同時期とされている。詳細がまだないので、はっきりしたことは判らないが、現在までの報文をみる限りではⅠA層から製粉具と考えられるものが出土したと記載しているものはない。また花粉分析の結果も農耕が盛んになるのはⅡ層以後としており、光沢のある鎌刃はあるものの生業における農耕の比率はなお低かったとできよう。ユーフラテス川流域と酷似した打製石器の様相および比率をもっているのに、製粉具の内容は大きく異っている。このあとの展開を考えると、きわめて興味深いものがある。PPNB の項で再び触れることにすることに。

ほぼ同様な様相をみせながら、ユーフラテス川流域とダマスクス盆地とでは、きわめて大きな差があることが明らかになった。もっとも Tell Aswad の調査にしても、Mureybet, Cheikh Hassan の調査にしても、ごく限られた面積しか調査されてはいないので、これには調査された範囲においてはとつけくわえないといけないのかもしれない。

しかし、Tell Aswad においては naviform 型の石核の出現も PPNB 段階に入っただけでなく、Ⅱ層になってから現れるようである。これは Mureybet においては、PPNA 段階のⅢ層ですでに出現しているものである。ダマスクス盆地の PPNB 段階の諸遺跡は

かなり密接な関係をユーフラテス川流域ともっているが、こうした例にみられるように、若干の時間差があるようである。

PPNB 段階

PPNB はさらに細分される可能性が指摘されている (Cauvin 1978・1981b, Aurenche・Cauvin・Cauvin・Copeland・Sanlaville 1981)。Cauvin 1981b による説明, PPNB が新しい環境に拡大する (1981b: 604) ことをもって、これを細分しようという説明は妥当なものであり、一見レヴァントの状況を適切に説明できたようにみえるが、個々の遺跡にあてはめた時にはなかなかあてはまらないことがあろう。やはり問題になるのは南レヴァントの PPNA と PPNB の断絶の期間の問題であろう。確かに北レヴァントでは、Cauvin らの 3 と 4 は状況を適切に説明できる編年案ではあるが、若干の問題もなくはない。

PPNA から連続して居住がみられるのは Mureybet と Tell Aswad の 2 遺跡でしかなく、おそらく Abu Hureyra が PPNB の比較的早い時期から居住され、PPNB のほとんど全期間居住されていたと考えるのが妥当であろう。

これに後半になり、ダマスクス盆地の Ghoraifé が加わり、さらに終末に近い時期にユーフラテス川中流域の Bouqras, Tell Assouad, ダマスクス盆地の Tell Ramad, ラタキア近くの海岸沿いの Ras Shamra が加わるというのが種々の状況を勘案して妥当なところかと思われる。これに近年調査が進められている el Kowm がやはり終末近くに加わろう。はっきりはしないが、パルミラ周辺にも拠点的な集落がある可能性が強い。

個々にみていくことにするが、断片的な記載しかないものがほとんどであり、全体的なことが判るのは Mureybet だけである。

Mureybet (Nierlé 1982) IV A・IV B¹層がこの時期の初頭から前半の早い時期をカバーするが、その後断絶してしまい、居住はこれをもっておわりとなる。

IV Aは磨石のみであり、III層の状況ときわめてよく類似している。石皿があれば非常に興味深いのであるが、下石は全くみられない。

IV Bは逆に下石ばかりで、上石は全くみられない。しかも石皿だけである。この石皿は全例開口部をもつ石皿である。PPNB 的様相が完全に確立したとみることができよう。

Natufian 的なものが主体の I・II層にIII層で初めて出現した開口部のある石皿が加わり、それがIV層になると完全に PPNB の特徴である開口部のある石皿のみになってしまう。

製粉具でも徐々に、徐々に Natufian から PPNB へと変っていくあり様がここ Mureybet で確認されている。正に他の要素での漸移的な変化の様相と軌を一にしている。北レヴァントの PPNA は PPNB を生む母体となったことが製粉具をとおしても確認された。

Tell Aswad (de Contenson 1972, de Contenson・Cauvin・van Zeist・Bakker-Heeres・Leroi-Gourhan 1979) 様相はあまりはっきりしない。この時期にあたる I B層の製粉具についての記

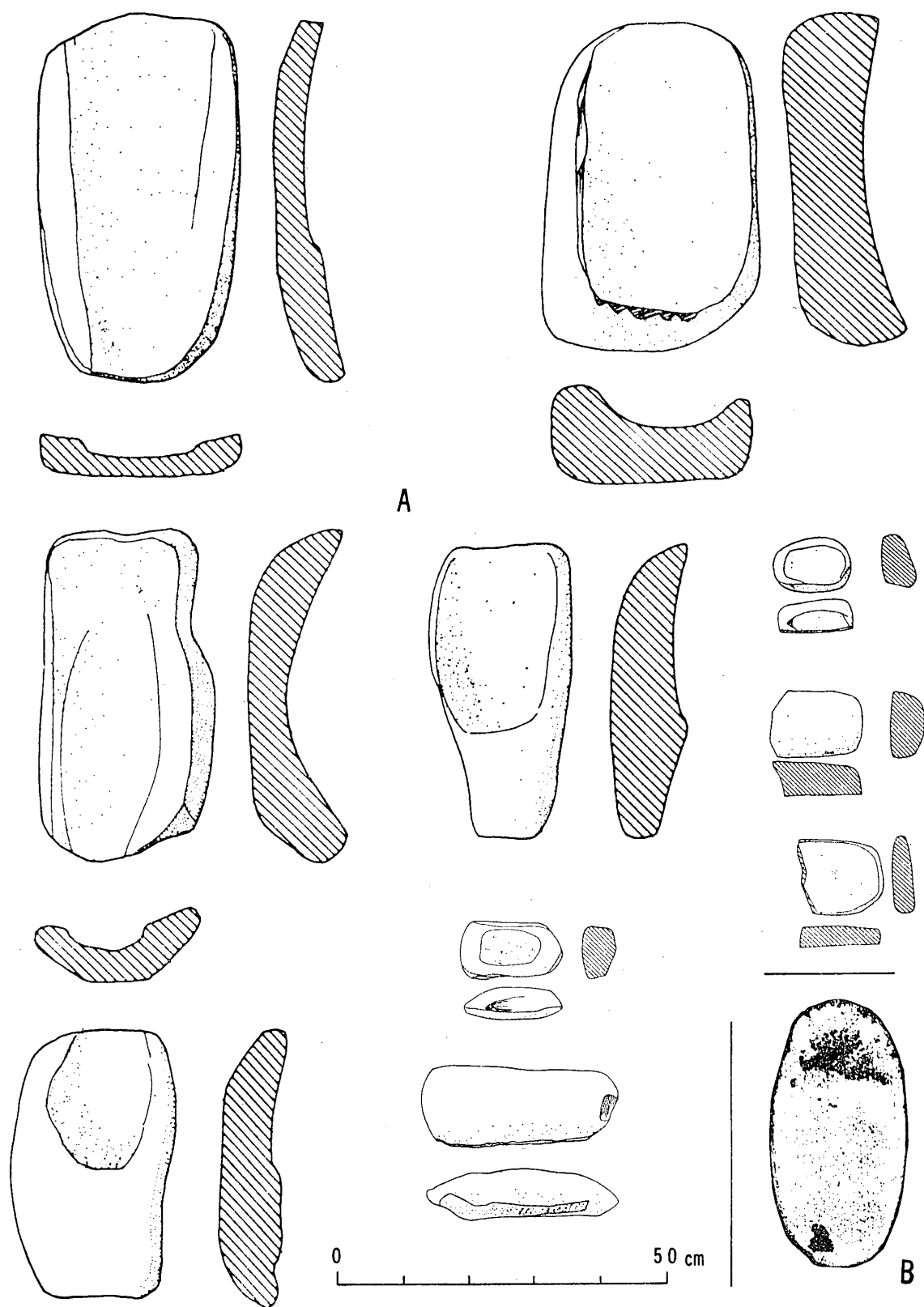


Fig. 3 Grinding-stones from Mureybet IV and saddle quern from Bouqras (A : Mureybet IV, B: Bouqras), (Nierlé 1982, de Contenson • van Liere 1966b)

載はない。Ⅱ層についての記載は1979に玄武岩製の石皿は非常に稀である(1979: 155)というのと1972に玄武岩が磨石、周辺の高くなる石皿(この言葉は開口部のある石皿に使用されている)などに用いられている(1972: 77)というものがあるだけである。

しかし、この二つの記載から、少なくとも PPNB の前半部分に入る Tell Aswad のⅡ層に PPNB 特有の開口部のある石皿が少数ではあってもみられることが確認できる。

Abu Hureyra (Moore・Hillman・Legge 1975) この PPNB 段階は二期にわけられていて、そのうち古いものは Mureybet Ⅳ に平行する時期のものと考えられている。記載はきわめて簡単であり、玄武岩の磨石があるとされているだけである(1975: 60)。どのようなものかは不明である。

新しい段階のものはおそらく Cauvin の4の段階に入るものと思われる。この記載もきわめて簡単であるが、重要な内容をもっている。やはり玄武岩製のものが主体となっているが、磨石と石皿がきわめて多量にあり、石皿はすべて磨臼(saddle quern)であるとしている。上石も磨石はほとんど断面が中高になった長いもののようである(1975: 63)。

この記載はきわめて短かいものであり、そこから多くを読みとるのは不可能であるが、きわめて重大である。PPNB の後半にあたると考えられる Abu Hureyra の新しい層では、製粉具が磨臼になっているのである。しかも全例が磨臼になっているというのは重要である。PPNB の古い層でどうであったのか、しりたいところである。Mureybet のⅣB層では、石皿は全例が PPNB 特有の開口部のある石皿であったのが、PPNB の後半の Abu Hureyra の新しい層ではこれが完全に磨臼になっている。変化はこの間にあったのであるが、それがどのような形であったのかは不明である。

Bouqras (de Contenson・van Liere 1966b, Akkermans・Fokkens・Waterbolk 1981, Akkermans・Boerma・Clason・Lohof・Meiklejohn・Mière・Molgat・Roodenberg・Waterbolk-van Rooyen・van Zeist 1983) やはりユーフラテス川中流域にある遺跡であるが、Mureybet や Abu Hureyra とは環境的にはかなり違っている。ハブール川がユーフラテス川に合流する位置のほぼ対岸にあり、またパルミラ方向にも大きなワディがあり、交通の要衝にあたっている。雨量は Mureybet や Abu Hureyra に比べるとかなり少なく、居住当時もこの傾向はあったようであり、出土している種々の要素から農耕の比率は低かったのではないかと考えられている。

PPNB の後半から、土器を伴う新石器文化の初頭に居住されていた遺跡で、Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ に分期されている。

ここでも製粉具についての記載はごく簡単である。玄武岩製の平らな石皿がある(1966b: 183)、多くの石皿はない(1966b: 184)、石灰岩の石皿と石臼がある(1966b: 186)、食パン形の磨石に装飾があり、磨石は長さ20~30cm、幅7~9cm ぐらいである(1983: 356)というのがその内容である。de Contenson・van Liere 1966b には図がついている。そのうちの12図aには、石皿、石杵、磨石の写真があり、それに説明がつけられている。この写真は最下層のⅠ層から出土したもの

であり、写真からみる限り、この石皿は磨臼と考えてよいものである。大きさも 40×20cm とかなり大きく、それに磨石も 26×10cm と上臼として適当な大きさと形態をしている。

こうした断片的な資料をつぎあわせ、またほぼ同一時期と考えられる Abu Hureyra の PPNB の新しい層の状況をもあわせ考えると、Bouqras では、その居住の当初より、磨臼が少なくとも製粉具の一部に使用されていたと考えることができよう。さらに Moore は博士論文のなかの Bouqras の記述で、磨臼と磨石が玄武岩と石灰岩で作られており、それが一般的にみられるとしている (1978: 178)。さらにこのなかで、Moore は石杵と石臼が少数ながらあるとしている。

このようにみてくると、PPNB の後半の時期には、ユーフラテス川中流域では、特にその拠点的な集落では、製粉具の主体は磨臼に移行していることがいえよう。開口部のある石皿から磨臼への転換が PPNB のなかで行われていたのである。

ダマスクス盆地には、やはり PPNB の後半の時期になってみられるようになる二つの遺跡がある。Ghoraifé と Tell Ramad である。

Ghoraifé (de Contenson 1975・1976a, Cauvin 1975~1977) Tell Aswad と同様のバラダ川の流れこむ湖沼地帯近くにあった遺跡であり、現在は平原の中に位置しているが、当時は湖近くにあったものと考えられている。この遺跡はあるいは PPNB の前半から居住されていたのかもしれないが、明確ではない。ごく簡単な記述があるだけであり、玄武岩製の石皿があることが判るだけである (1975: 119)。

Ramad (de Contenson・van Liere 1964・1966a, de Contenson 1967・1969a・1969b・1970・1971・1974) 数多くの調査がなされているが、詳報はまだない。ダマスクス盆地のなかといっても西の山麓によったところにある遺跡で、現在の雨量も Tell Aswad や Ghoraifé のある地域よりも多い。当時もおそらくそうであり、PPNB 後半になり、Ramad の地が選ばれたのはそれなりの理由があったものと思われる。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに分期されている。PPNB の後半から、土器を伴う新石器文化の初頭に近い時期まで居住されている。

製粉具に関する記載はやはり少ない。玄武岩製の円筒形の石杵、二段の曲面のある石皿（開口部のある二段の磨面をもつ石皿と考えられる）、磨石がある (1964: 114)、開口部のある石皿がある (1964: 120)、玄武岩がパレスティナ形の (Jericho PPNB, Munhata 3~6, Hagoshrim) 2 段の磨面をもつ石皿、石臼、石杵、磨石を作るのに使用されている (1971: 280)、玄武岩製の石臼・石杵・開口部のある石皿がある (1974: 19~20) が Ramad Ⅰの製粉具に関する記述である。Ramad Ⅱについては、Ⅰと同じ伝統 (1964: 117)、玄武岩が石皿、磨石に使用 (1964: 120) しかなく、Ramad Ⅲにいたっては、玄武岩が磨石、石杵に使われる (1964: 118) しかない。

しかし、Ramad でも、PPNB の後半に開口部のある石皿が Tell Aswad 同様に使用されていたことは確実である。

ダマスクス盆地では、PPNB の時期を通して、開口部のある石皿が使われ続けているようであり、この点では南レヴァントと酷似した様相である。また石皿のほかにも石杵・石臼が利用されて

いるようであり、断片的な資料からではあるがダマスクス盆地の様相の一端を知ることができよう。

このあとダマスクス盆地の製粉具がどのようなになるかの問題がある。Ramad では、Ⅲ層に Ras Shamra, Byblos と関連の強い土器がみられるようになるが、住居址なども明確なものがみられないようになり、テルはその後放棄されてしまう。南レヴァントにみられるのと類似の状況があり、しばらく無人の地になるか、遊牧形態をとるかして定住しない生活形態をとるかするようになったものと思われる。PPNB をもって断絶する遺跡が多いことは既に指摘され、その原因にも触れられているが（藤井 1981：73～75）、ダマスクス盆地も南レヴァント同様に遺跡がなくなってしまう。

従って、このあとの製粉具がどのようなになるかは不明である。現在判っていることは、ユーフラテス川流域とは異り、PPNB の時期を通して、開口部のある石皿が使われ続けていたということである。

この時期になると、またさらにはっきりしてくるのは次の土器を伴う新石器文化の時期であるが、従来あまり居住されていなかった北レヴァントの海岸地帯に大規模なテルが出現する。これはその後ひき続いて居住がなされ、文献出現以後も居住され、現在にいたっているものもある。これは単に海岸地帯だけではなく、内陸部においても、土器をもった新石器文化の時期以後に居住されている遺跡は永い居住の歴史をもっているものが多く、今日でもその地域の中心的存在となっていることがある。

北レヴァントの海岸地帯では、Ras Shamra, Byblos がこうした遺跡の好例としてあげられよう。

Ras Shamra (de Contenson 1962・1977・1977～1978) ラタキア近くの海岸近くにある巨大なテルであり、古くからフランス隊によって調査が続けられている。PPNB は最下層の Ras Shamra VC で発見されている。PPNB 以後居住が続けられているきわめて稀な遺跡である。PPNB 層である VC には、玄武岩製の石皿、磨石があることは確実である（1962：509, 1977：16, 1977～78：14）。

PPNB 層の上にある土器を伴う新石器文化の層である VB もしくは VA になると磨臼が出現する（1962：505）。ユーフラテス川中流域に比べると若干遅れるが、ここで磨臼がみられるようになる。

またやはり地中海岸にある Byblos でも同様な現象がみられる。Byblos も大きなテルであり、永い居住がみられる。この最下層は、Neolithique ancien として Ras Shamra VA と同じ時期と考えられている（de Contenson 1982：95）。ここから、磨臼と考えられるものが多量に出土している（Dunand 1973：36～37）。またこれに対応する多くの磨石もみられる。

このように北レヴァントの地中海岸地帯では、PPNB の時期の製粉具は存在することしか判ってはいないが、土器を伴う新石器文化の初頭に近い時期に磨臼に転換することがはっきりしている。ダマスクス盆地よりも早い転換ということができようか。

このほかにも、PPNB の遺跡は北レヴァントに数多くあるが、いずれも製粉具についての記載に乏しい。

また PPNB 段階になると、拠点集落とそうでない地点との間の較差が広がるようになる。いわゆる base camp と gathering camp もしくは hunting camp の差である。拠点集落は従来の時期とは比べものにならないくらい大型になり、数百人を居住させる、あるいはより大きな住民をかかえるものもでてきているようである。こうしたところと時々ごく少人数の人間が訪れる地点とでは、自ら製粉具に対する要求も大きく異っていたものと考えられる。

ここで利用してきた数多くの文献は製粉具に関しては、ごく断片的な記載しかない。僅かに Nierlé のものがもっとも問題のある時期について詳しくみてくれたので、これに大きく依存する形となった。若干の補正が将来、これらの遺跡の本報告がでそろったところで必要になるかもしれないが、大綱は大きく変えることはないように考える。

3

前項で断片的な資料をつなぎあわせてみてきたように北レヴァントの状況は南レヴァントの様相と大きく異っている。唯一レヴァント全体に斉一的な様相がみられるのは、PPNB のある時期である。ユーフラテス川中流域で成立したいわゆる open quern, 開口部をもつ石皿とそれにみあう磨石が北レヴァントだけでなく、南レヴァントにもみられるようになる PPNB のある時期である。しかし、これも永くは続かず、ユーフラテス川中流域ではさらに効率のよい磨臼が PPNB の後半の時期にみられるようになる。

北レヴァントと南レヴァントを比較しつつ、製粉具の推移をまとめておくことにする。

Kebaran, Geometric Kebaran 段階では、北レヴァントにはごく少数のものが、しかも製粉具とするには疑問のあるものがみられるだけであり、南レヴァントの地中海性気候地帯にみられるような石臼と石杵というセットはみられない。北レヴァントでは、遺跡の数も南に比べるときわめて少ない。

Natufian 段階は、南レヴァントでは地中海性気候地域が主であるが、その地の典型的 Natufian に石臼・石杵が主体であるが、多彩なしかも豊富な製粉具がみれる。完成度も高く、仕あげも入念なものである。

北レヴァントでは、数も少なく、完成度もきわめて低いが、磨石と石皿というセットがみられる。これは円礫の外形にはほとんど手を加えずに石皿もしくは磨石にしているもので、手近にある材料を使い製品にしている。南レヴァントの Natufian にも石皿と磨石はみられるが、主体はあくまでも石臼と石杵である。

植物の利用度は製粉具と鎌刃の出土量、出土比率から、両者は比べものにならない。北レヴァントでは、ごく少量の利用にとどまっていたようである。しかし、その利用法は磨石と石皿による方法であったようである。

PPNA 段階に入ると双方とも新しい様相がみられるが、そのありかたは大きく異ってくる。南レヴァントでは、Natufian の伝統にある石皿と磨石が主体となり、石臼と石杵はより南の Harifian

にみられるが、地中海性気候地帯ではその比率はきわめて低くなる。南レヴァントの PPNA では、石皿と磨石のセットが製粉具の主流となる。これに cup-hole が加わる。

一方、北レヴァントでは、作りはあいかわらず粗雑であるが、新しい要素が Natufian 段階のものに加わってくる。石皿と石臼の機能を一つの石器にもたせている「石皿・石臼」の出現であり、開口部をもつ石皿の出現である。これに対応する磨石、石杵もみられるようになる。作りは前代の伝統をひいてか、きわめて粗雑であり、形は原材料となった原材に大きく影響を受け、バラツキがある。しかし、機能という面から考えると、これは全くとるにたらないことである。出土量も飛躍的に増大する。この時期の北レヴァントは古い要素の中に新しい要素が入り、新旧両要素が混在しているようである。南レヴァント同様に cup-hole もみられる。この cup-hole はこの時期に限りみられるようであり、この点も南レヴァントとは違っている。

北レヴァントの PPNA といっても、明確に判っているのはユーフラテス川流域の Mureybet と Cheikh Hassan だけであるが、ここにみられる新しい要素のなかの一つが、このあとの時期である PPNB の時期に全レヴァントをおおうようになる。開口部のある石皿とそれに対応する磨石である。これは北レヴァントの PPNA 段階では、形だけは開口部をもっているものの外形はもとになる石材をほとんど加工しないで使うためか、形には斉一性があまりみられない。しかし、明らかに土着の伝統のなかから生れてきたものとみることのできるものである。

このように PPNA の時期の北レヴァントは土着の伝統のなかから新しい要素が育ってきているのに対し、南レヴァントでは旧来の伝統の延長上にとどまっている。完成度および作りという点では、南レヴァントのものは北レヴァントのものより数段上であるが、機能的にみた場合には、新しい、より効率的な方向性はないといってもよいであろう。

Natufian は、典型的な意味における Natufian はパレスティナの地中海性気候地帯に適應するという意味では、世界的にみてももっとも完成度の高い採集経済の社会であったといわれることがある。あまりにも、その当時の環境に適應した生業体系ができあがりすぎていたため、ちょっとした気候変動が訪れたり、人間の側におけるたとえば人口の増減などが生じると、それに対応する潜在的な適應力はあまりなかったのかもしれない。

PPNB 段階になると先にもふれたように、ユーフラテス川中流域の Mureybet および Cheikh Hassan で先駆的にみられた開口部のある石皿およびそれに対応する磨石が全レヴァントの拠点的集落にみられるようになる。その成長のありさまは Mureybet でよくみられる。作りはあいかわらず悪いが、大きさはほぼ規格性をもってきている。Mureybet III から Mureybet IV にかけての間に規格性をもちあわせたのであろう。

南レヴァントでは、旧来の伝統が消えさり、北レヴァントで育った開口部のある石皿がより完成された形で、十分に整えられたものがみられるようになる。この後これが使われ続け、磨臼はかなりあとになって入ってくることになる（藤本 1984）。

北レヴァントでは、PPNB の後半に Abu Hureyra, Bouqras にみられるように磨臼がみられ

るようになる。これが土着の要素のなかからのものなのか、他からの影響があったものなのかははっきりしない。土着の要素のなかからの可能性も強いが、それを詳細にみることのできる遺跡の報告はまだない。

磨臼は若干時期は遅れるが、土器を伴う新石器文化の早い頃、北レヴァントの海岸地帯にもみられるようになる。南レヴァントへの分布は遅くなるが、北レヴァント一帯で広く利用されることになる。

このように北レヴァントでは、PPNBの後半から土器を伴う新石器文化の初頭までに農耕をし、そこから得られた穀物を加工する技術的背景はほとんど出揃うことになる。

ここで製粉具に関して、メソポタミア平原の東に位置するイラン、イラクにある諸遺跡との間で興味深い事実がある。これらの地域はまだ詳しくみている訳ではないので詳説はしないが、二つの点で興味深い。

一つは、「石皿・石臼」である。これはイラクの Zawi Chemi Shanidar (Solecki 1969), Jarmo (Braidwood・Howe 1960), イランの Ali Kosh (Hole・Frannery・Neely 1969) などにかかなりの量がみられる。レヴァントでは、PPNAの時期の Mureybet と Cheikh Hassan にみられる。遠距離の遺跡間の広域的対比、特に土器のない時期の広域対比は困難である。現状ではかなり大きな危険をもつことを考えに入れてC14年代にせざるをえない。

メソポタミア平原の東では、この「石皿・石臼」が8,000年 bc. 前後から、6,000年 bc. 前後までみられることになる。北レヴァントの PPNA はやはり8,000年 bc. 前後の年代があたえられている。ほぼ同じような時期にみられることになる。

他の一つは磨臼である。これはメソポタミア平原の東では、Jarmo (Braidwood・Howe 1960), にみられ、Ali Kosh (Hole・Frannery・Neely 1969) の Bus Mordeh 期に少量みられ、Ali Kosh 期に大量にみられるようになる。北レヴァントでは PPNB の後半である。

Jarmo は6,500年 bc. 前後、Ali Kosh の Ali Kosh 期も6,500年 bc. 前後、Ali Kosh の Bus Mordeh 期はそれより若干古く、7,000年 bc. 前後の時期と考えられている。北レヴァントの PPNB の後半は6,500年 bc. 前後とされており、Jarmo, Ali Kosh の Ali Kosh 期ときわめて近い関係にある。こうした年代は必ずしもピン・スポットでもないし、Bus Mordeh 期が若干古くなる可能性はあるものの、ほぼ同じ時期にレヴァントでもメソポタミア平原の東側でも磨臼がみられるようになると考えてもよいように思われる。

そのうちのどちらが初現であったかを議論するのは空しい。Jarmo にしても、Ali Kosh にしても数多くのC14年代が提出されており、それらを勘案して、現在の定説的年代が出されているのである。

ただこうした例にもみられるようなほぼ同一時期にかなり離れた地域で新しい製粉具が成立するのは単なる偶然なのであろうか。打製石器の石器組成は大きく異っているし、石器製作技術も異っている。このあとの時代にみられる土器の初現もほぼ類似の時期である。しかし、各地で初現する

土器の様相はかなり違うものである。

PPNB の時期には、それぞれの遺跡に数多くの遠隔地産の物資がみられるようになる。広域にわたる交易のネットワークができあがっていたのは確実である。こうしたものを通して、種々の情報が西アジア全域に比較的短時間の間に広まることは十分に考えられる。とすると、私達の眼には具体的な姿でとらえ難い、栽培技術・育成技術というようなものもどこかで確立すると同様な環境、同様な技術水準にある地域にはすみやかに伝播したことも十分に考えられることである。

しかし、各地にみられる栽培植物、家畜化された動物は必ずしも同一ではないし、また遺物という姿で把えられる石器や土器についても、その製作技術や形態は大きく異っている。それぞれの地域のおかれていた環境あるいはそれぞれの地域で育っていた技術伝統にもとづいて、基本的なアイディアを踏襲しつつも、地域地域でそれを変形していた可能性が強い。

4

先に PPNB の時期にそれ以後の農耕生活に関する道具は出揃うと述べているが、PPNB の時期は製粉具以外の種々の要素についても一つの画期である。このうちのほとんどが PPNA の時期の Mureybet もしくは Cheikh Hassan にその萌芽がみられるものである。

大規模な集落の成立、多室構造の四角形の住居、栽培種の麦類の種子および花粉の増大、ヒツジ、ヤギを主なものとする家畜化された動物遺存体の激増、完全な磨製による石斧の製作、規格化された石鏃・鎌刃の生産を可能にする石刃製作 (naviform 型の石核の成立) などの要素である。これはこのあとレヴァントで永く受けつがれていくものである。

こうした要素はレヴァント全域でみられ、斉一性もかなり高い。生業面では、農耕・牧畜の占める比率が前代に比べ、はるかに高くなってはいるが、なお狩猟・採集・漁撈の占める割合もかなり残っている。また遺跡毎・地域毎の較差が拡がってもくるようである。海岸地帯と内陸とでは、石鏃と鎌刃の比率は異っているし、最南部のシナイ・ネゲヴでは鎌刃はほとんど発見されない。また大規模な集落は数 ha 以上のものがみられるのに対し、小規模なものは数～数十 m² の範囲に石器が少量落ちているだけというように、地域毎、遺跡毎に生業も大きく変っていたようである。

大規模な集落においてもたとえば Bouqras では、農耕よりも牧畜に主な生業はあったとされる (Akkermans・Boerma・Clason・Hill・Lohof・Meiklejohn・Mière・Molgat・Roodenberg・Waterbolk-van Rooyen・van Zeist 1983: 370) ように、定住生活を営みながらより牧畜に比重を置いている集落も生れている。ここではワディ底とユーフラテス川の沖積地で農耕を、台地上の草原で牧畜をとという生業が推測されている。

PPNB の後半に砂漠の周辺にまで、居住域が拡大しているのが確認されているが、それにはこうした背景があったのであろう。未利用の土地であった台地上の草原を牧畜という形で利用することによって、生活圏の拡大が可能になったものと考えることができよう。

また、石器がバラバラと小範囲に散っている遺跡は拠点集落の hunting camp とも考えること

ができようが、牧畜もしくは狩猟を主生業とする小集団の移動生活のあととも考えることができよう。非常に幅の広い生業体系の可能性があると考えられる。

PPNB の時期に農耕社会と呼べるものが成立していたかどうかの問題がある。既に藤井によっても指摘されているように(1981: 73), PPNB 末から初期の土器をもつ新石器文化にかけて、おおくの集落が放棄されている。これが気候変化の影響ということは認められようが、その対応の様相はさまざまである。藤井はシリア・アナトリア型とパレスティナ型に農耕をわけ、対応のしかたを説明しているが(1981: 73~75), 説得力のあるものである。確かに南部レヴァントでは、農耕の放棄ということで説明がつこう。北部レヴァントでは、一つには気候変化によって対応不能になって、場所を移動するということが考えられる。しかし、そのみであろうか。より農耕適地の広いところを求めて、より大規模な農耕が可能な土地を求めて、気候変化を一つのキッカケとして移動したとも考えられよう。PPNB の大規模な集落はいずれも沖積地と台地の接点近くに位置している。これは農耕と牧畜を主にして、これに加えて採集・狩猟あるいは漁撈というもののバランスの上にたった生業を営むには好適の場所であったものと思われる。いわば環境と環境の接点という立地である。採集経済段階では、各種の生業を営む都合上、多くの異った環境が小範囲にモザイク状にある立地が選ばれることが多い。こうしたものが一つの地点に集中していない場合には、季節移動という形態をとってその欠を補う。南部レヴァントは正にこうした環境に富んでいる。

PPNB の大規模な集落の立地はより広い環境をもつ地域にはなっているが、やはりいくつかの生業を行うために、異った環境の接点に位置している。いわば、採集経済的な面を残した地点の選び方をしているといえよう。従って、まだフレキシビリティに富んだ生業体系をもっているといっていよいものである。まだ多くの可能性に富んだものといってもよからう。従って、遊牧生活にも他の形の農耕生活にも転換が可能であったものと考えることができよう。

しかしながら、それ以後の時期では、一度居をすえると永く居住するという傾向が顕著になる。土器を伴う新石器文化になってから居住されている集落はその後にも居住が続けられているものが多い。これはその後の展開にあった土地に集落が営なまれたことを示していよう。その多くは広い耕地のあるところに位置している。またより低い土地にという傾向も認められる。さらにこうしたところでは灌漑の施設も作られるようになる。灌漑については Cauvin もとりあげており(1978: 81~84), Abu Hureyra については灌漑の可能性も指摘されている(Moore 1979: 67, 1981: 448)。より古い時期にこのような可能性が指摘されており、土器を伴う新石器文化においてはこれは十分に可能性のあるところである。特に比較的水位の高い低地であれば灌漑施設を作るのは比較的容易である。

灌漑施設のある耕地、またこれらの地点の多くは麦類の自生地の外になろうから、必然的に播種から刈り入れまでの過程には注意が必要になる。しかも新しく進出した土地は単一の環境が広く広がるところがほとんどである。自然の生態系の外に出て、麦類を作る。家畜化したヤギ、ヒツジをこれまた自然の生態系の外にもちだして飼育する。単一の環境のなかでは、狩猟・採集できるもの

も限られている。こうなるともうあとにはもどれない。ひたすら、自らの力で、できあがった生業を護っていかざるをえないことになる。

ここで、農耕を基盤にした農耕社会が生れることになる。これは永続性のあるものであり、一度居住した地点から他所に移ることは不可能とはいわないまでも多くの困難を伴うことになる。

PPNB 期には、農耕に関する技術的側面は完全に整備されたといってもいいであろうが、藤井もいっているように(1981:70)、農耕社会の確立期にはならないものと考えられる。むしろ揺籃期という表現があてはまる。農耕社会の確立期は初期の土器を伴う新石器文化の時期に求めるべきであろう。

立地をみる限り、採集経済に有利な環境、PPNB 期にみられるような採集経済から生産経済への過渡期に有利な環境、生産経済に有利な環境がそれぞれにあり、複数の小範囲の環境がモザイク状にみられる環境、中間的環境、単一の広大な環境がそれぞれの段階にあてはまる。

このようなことがその時期その時期の技術的伝統、社会組織と関連しつつ、それぞれの時期の先進地域が移動する主な理由となる。農耕への道、農耕社会への道は単純でもなければ、一直線でもない。自然環境の推移と文化伝統により幾重にも折れ曲ったものである。

註

- 1) 藤本1984:130で Mureybet のⅣ層の時期の比定に PPNA, PPNB を使用しているが、これは南レヴァントのものであり、本稿で使用しているものは北レヴァントのものである。本文中でも触れているように、この間には若干の時間差がある。従って、矛盾があるようにみえるが、南レヴァントの PPNA は北レヴァントの PPNB の時期まで残存していた可能性が強いし、少なくとも南レヴァントの PPNB の開始は北レヴァントに比べると、かなり遅れることは確実である。

参 考 文 献

- 藤井純夫, 1981, レヴァント初期農耕文化の研究, 岡山市立オリエント美術館紀要, 1: 1~87
- 藤本 強, 1983, 石皿・磨石・石臼・石杵・磨臼(Ⅰ), 東京大学考古学研究室紀要, 2: 47~75
- 藤本 強, 1984, 石皿・磨石・石臼・石杵・磨臼(Ⅱ), 東京大学考古学研究室紀要, 3: 105~143
- Akkermans, P. A., Boerma, A. J. K., Clason, A. T., Hill, S. G., Lohof, E., Meiklejohn, C., le Mièr, M., Molgat, G. M. F., Roodenberg, J. J., Waterbolk-van Rooyen, W. and van Zeist, W. 1983 Bouqras Revisited: Preliminary Report on a Project in Eastern Syria. P. P. S. 49: 335-372.
- _____, Fokkens, H. and Waterbolk, H. T. 1981 Stratigraphy, Architecture and Lay-out of Bouqras. in: Cauvin ed. 1981:485-501.
- Aurenche, O., Cauvin, J., Cauvin, M. C., Copeland, L., Hours, F., et Sanlaville, P. 1981 Chronologie et Organization de l'Espace dans le Proche Orient de 12000 à 5600 av. J.C.. dans: Cauvin ed. 1981:571-600.
- Bar-Yosef, O. 1981 The Epipaleolithic Complexes in the Southern Levant. in: Cauvin ed. 1981: 389-407.

- Braidwood, R. J. and Howe, B. 1960 Prehistoric Investigations in Iraqi Kurdistan. Chicago.
- Cauvin, J. 1972 Nouvelles Fouilles à Tell Mureybet (Syrie) 1971-1972. A. A. A. S. 22:105-115.
- 1974 Troisième Campagne de Fouilles à Tell Mureybet (Syrie) en 1973. A. A. A. S. 24: 48-57.
- 1977 Les fouilles de Mureybet (1971-1974) et leur signification pour les origines de la sédentarisation au Proche-Orient. A. A. S. O. R. 246:19-48.
- 1978 Les premiers villages de Syrie-Palestine du IX^{ème} au VII^{ème} millénaire avant J. C. Lyon.
- 1980 Le Moyen-Euphrate VIII^e millénaire d'après Mureybet et Cheikh Hassan. dans: Margueron ed. 1980:21-34.
- 1981a L'occupation néolithique de la région d'el Kown: Résultats 1978-1979. dans: Cauvin ed. 1981:471-483.
- 1981b Le néolithique du Levant. dans: Cauvin ed. 1981:603-606.
- ed. 1981 Préhistoire du Levant. Paris.
- , Cauvin, M. C. et Stordeur, D. 1979 Recherches préhistoriques à el Kown (Syrie). Cahiers de l'Euphrate 2:80-117.
- Cauvin, M. C. 1974 Outillage lithique et chronologie à Tell Aswad. Paleorient 2:429-436.
- 1975-1977 Outillage lithique et chronologie de Tell Ghoraifé C. Paleorient 3: 295-304.
- 1981 L'épipaléolithique de Syrie d'après les premières recherches dans la cuvette d'el Kown (1978-1979). dans Cauvin ed. 1981:375-388.
- 1983 Cadre chronologique du néolithique. Problèmes posés par la typologie et l'étude des traces. dans: Cauvin ed. 1983:9-15.
- ed. 1983 Traces d'utilisation sur les outils néolithiques du Proche Orient. Lyon.
- de Contenson, H. 1962 Poursuite des recherches dans le sondage à l'ouest du Temple de Baal (1955-60). dans: Schaeffer 1962:477-519.
- 1967 Troisième campagne à Tell Ramad, 1966. A. A. A. S. 17:17-24.
- 1969a Quatrième et cinquième campagnes à Tell Ramad, 1967-1968. A. A. A. S. 19: 25-30
- 1969b Sixième campagne de fouilles à Tell Ramad en 1969. A. A. A. S. 19:31-35.
- 1970 Septième campagne de fouilles à Tell Ramad en 1970. A. A. A. S. 20:77-79.
- 1971 Tell Ramad, a Village of Syria of the 7th and 6th Millennia B. C., Archaeology 24:278-285.
- 1972 Tell Aswad. Fouilles de 1971. A. A. A. S. 22:75-83.
- 1973 Chronologie absolue de Tell Aswad. B. S. P. F. 70:253-256.
- 1974 Huitième campagne de fouilles à Tell Ramad en 1973. A. A. A. S. 24:17-22.
- 1975 Les fouilles à Ghoraifé 1974. A. A. A. S. 25:17-24.
- 1976a Nouvelles données sur le néolithique précéramique dans la région de Damas (Syrie) d'après les fouilles à Ghoraifé en 1974. B. S. P. F. 73:80-82.
- 1976b Précision sur la stratigraphie de Tell Aswad (Syrie). B. S. P. F. 73:198-199.
- 1977 Le néolithique de Ras Shamra V d'après les campagnes 1972-1976 dans le sondage SH. Syria 54:1-23.
- 1977-1978a Le niveau de Ras Shamra rapport préliminaire des campagnes 1972-

- 1976 dans sondage SH. A. A. A. S. 27-28: 9-27.
- de Contenson, H. 1977-1978b Tell Aswad; Fouilles de 1972. A. A. A. S. 27-28: 207-215.
- 1982 Les phases préhistoriques de Ras Shamra et de l'Amouq. *Paleorient* 8: 95-98.
- , Cauvin, M. C., van Zeist, W., Bakker-Heeres, J. A. H. et Leroi-Gourhan, Ar. 1979 Tell Aswad (Damascene). *Paleorient* 5: 153-176.
- et van Liere, W. J. 1964 Sondages à Tell Ramad en 1963. A. A. A. S. 14: 109-128.
- et ————— 1966a Seconde campagne à Tell Ramad, 1965. A. A. A. S. 16: 167-176.
- et ————— 1966b Premier sondage à Bouqras en 1965. A. A. A. S. 16: 181-192.
- Copeland, L. 1979 Observations on the Prehistory of the Balikh Valley, Syria, during the 7th to the 4th millennia B. C.. *Paleorient* 5:251-275.
- 1981 The Flint Industries of the Nahr Qoueiq Valley. B. A. R. International Series 98: 81-129.
- Dunand, M. 1973 Fouilles de Byblos T. 4. Paris.
- Fujimoto, T. 1979a The Epi-Paleolithic Assemblages of Douara Cave. The University Museum, The University of Tokyo, Bulletin 16:47-75.
- 1979b Upper Paleolithic and Epi-Paleolithic Assemblages in the Palmyra Basin. The University Museum, The University of Tokyo, Bulletin 16:77-130.
- Hole, F., Flannery, K. V. and Neely, J. A. 1969 Prehistory and Human Ecology of the Deh Luran Plain. Ann Arbor.
- van Loon, M. 1966 First Results of the 1965 Excavations at Tell Mureybat near Meskene. A. A. A. S. 16:211-217.
- 1968 The Oriental Institute Excavations at Mureybit, Syria: Preliminary Report on the 1965 campaign. *Journal of Near Eastern Studies* 27:265-282.
- Margueron, J. Cl. ed. 1980 Le Moyen Euphrate. Strasbourg.
- Moore, A. M. T. 1975 The Excavation at Tell Abu Hureyra. A. A. A. S. 25:115-127.
- 1978 The Neolithic of the Levant. University Microfilm International 78-70075.
- 1981 North Syria in Neolithic 2. in: Cauvin ed. 1981:445-456.
- 1982 A Four-Stage Sequence for the Levantine Neolithic, ca. 8500-3750 B. C.. B. A. S. O. R. 246:1-34.
- , Hillman, G. C. and Legge, A. J. 1975 The Excavation of Tell Abu Hureyra in Syria: A Preliminary report. P. P. S. 41:50-77.
- Nierlé, M. C. 1982 Mureybet et Cheikh Hassan (Syrie): Outillage de mouture et de broyage (9ème et 8ème millénaires). *Cahiers de l'Euphrate* 3:177-216.
- Renfrew, C., Dixon, J. E. and Cann, J. R. 1966 Obsidian and Early Cultural Contact in the Near East. P. P. S. 32:30-72.
- , ————— and ————— 1968 Further Analysis of Near Eastern Obsidians. P. P. S. 34:319-331.
- Roodenberg, Co. 1976 Une industrie épipaléolithique sur le Nahr el Homr (Syrie). A. A. A. S. 26: 71-81.
- Shaeffer, C. F. A. 1962 Ugaritica IV. Paris.
- Solecki, R. S. 1969 Milling tools and the Epi-paleolithic in the Near East. in: Etudes sur le Quaternaire dans le monde: 989-994.

石皿・磨石・石臼・石杵・磨臼(Ⅱ)補遺

前稿においては、Jericho の本報告が出版されているのは知ってはいたが、それをみる機会が得られなかったため、それを参照しないでいた。本報告 (Kenyon・Holland 1983) 中に P. G. Dorrell 氏が石製の道具について寄稿している (1983)。それによっても前回のものを大きく変更する必要はないが、前稿の125～126頁の磨臼についての項を若干補っておく必要がある。

Dorrell 氏によると Pottery Neolithic に3点の石皿もしくは磨臼があり、そのうちの1点は青銅器時代の saddle quern に類似しているという記述がある (p. 549)。しかしその幅は 16cm と狭いし、Pl. 18a の写真も磨臼とするには、若干疑問がある。次の Proto-urban 期には3例あり、1例は PPNB 以来の開口部のあるものであり、2例が磨臼であるとされている (p. 552)。これらは幅 22cm とまずは妥当な大きさをもっている。しかし個数は必ずしも多くはない。前期青銅器時代になると製粉具はすべて磨臼になる (p. 558～9)。個数も12個とかなりの数が出土している。

結局、前稿で疑問としていたものは本報告においても疑わしいものであり、Jericho でも磨臼の初源はほぼ Ghassulian に平行する Proto-urban 期とするのが妥当であり、その盛行は前期青銅器時代になるとすることができよう。従来論旨を大きく変える必要は全くないものと思われる。

参 考 文 献

- Dorrell, P. G. 1983 Stone Vessels, Tools, and Objects. In: Kenyon and Holland 1983:485-575.
Kenyon, K. M. and Holland, T. A. 1983 Excavations at Jericho V. London.

Grinding-slabs, Hand-stones, Mortars, Pestles, and Saddle Querns 3

—Epi-Paleolithic and Neolithic of the Northern Levant—

Tsuyoshi FUJIMOTO

1

The author describes the stone-tools of the pre-Natufian phases of this area (Fujimoto 1984). Recently, sites belonging to the Epi-Paleolithic have been found in the Palmyra Basin, near el Kowm and in the middle Euphrates region, but they are scarce in the Northern Levant. As compared with the Southern Levant, the number of sites of these phases which have stone tools for processing cereals is very scarce.

Only small numbers of stone tools are found in the Natufian Layer of Mureybet and Abu Hureyra and they are grinding-slabs, hand-stones and mortars. They are natural pebbles which have grinding faces. They are not made as a standardized type. In the Natufian sites of the Southern Levant such as Ain Mallaha, numerous mortars and pestles which are standardized and perfect are found. However, the specimens found in the Natufian layers of Mureybet and Abu Hureyra are neither standardized nor perfect but very primitive.

At sites at the foot of the Lebanon Mountains and Anti-Lebanon Mountains, such as Jiita and Jabrud, stone tools for processing cereals have not been found. Compared with the Southern Levant, different aspects are seen. Seen from the later development of stone tools for processing cereals, it is very interesting that the lower stones from Mureybet are large grinding-slabs.

2

The PPNA (Pre-Pottery Neolithic A) phase of Mureybet(III) is the most interesting. This layer of Mureybet is transitional in many respects, such as structural remains, chipped stones and natural remains. This aspect is also seen in stone tools for processing cereals. First, the number of grinding tools for processing cereals highly increased. Secondly, standardization began to be seen in sizes and forms of grinding-slabs, mortars, hand-stones and pestles. Thirdly, new types of stone tools such as pestles, cup-holes and *Meule-Mortars* began to appear. Natural grinding pebbles of the former phases remained. They were used greatly. It is characteristic of this layer that new types of grinding tools began to be seen among old

types of stone tools. The most characteristic tools of this cultural layer are *meule-mortars* and *open-querns*. *Meule-mortars* are used as meules and as mortars. The number of these specimens is fairly large. Pestles might form a set with *meule-mortars*. *Open-querns* were widely distributed in the PPNB (Pre-Pottery Neolithic B) phase. They were seen not only in the Northern Levant, but also in the Southern Levant during the PPNB phase. This is one of the reasons why PPNB of the Southern Levant originated in PPNB of the Northern Levant. *Open-querns* have never been seen in the Southern Levant in so early a phase as in the Northern Levant.

The same types of grinding-stones are seen among the stone tools of Cheikh Hassan. This site is situated in the middle Euphrates region. Hand-stones, pestles, grinding-slabs, *meule-mortars* and *open-querns* are found in the PPNA layer of this site. Sites of the PPNA phase are very scarce in the Northern Levant.

Open-querns are efficient tools for milling. The appearance of *open-querns* shows that need for an efficient grinding-tool for wheat increased rapidly in this phase. This aspect also means that cultivation of wheat increased in this phase around the middle Euphrates region. Finds of grinding-tools have not been reported from the PPNA layer of Tell Aswad in the Damascus Basin. Differences between the middle Euphrates region and the Damascus Basin are apparent. It is evident that during this stage the sites in the middle Euphrates region were forerunners.

3

Open-querns became popular in the earlier stage of the PPNB phase around the middle Euphrates region. At Mureybet, all of the lower grinding-tools of layer IVB are *open-querns*. From the lower layer, IVA, no lower grinding-tools, only upper grinding-tools were found. Changing features of grinding-tools at Mureybet are very interesting. At Mureybet, grinding-pebbles were dominant in cultural layers I and II. Small numbers of primitive *open-querns* first appeared in cultural layer III. And finally, *open-querns* became the only lower grinding-tools in cultural layer IV. The gradual development from the cultural complexes of Natufianoid to those of PPNB is seen in many cultural traditions of Mureybet. The same development is also seen in the changing aspects of grinding-tools of Mureybet. In cultural layer II of Tell Aswad in the Damascus Basin, *open-querns* are seen, too.

In the upper PPNB layer of Abu Hureyra in the middle Euphrates area, saddle querns appeared and the only lower grinding-tools were saddle querns. Saddle querns also appeared

in the PPNB layer at Bouqras of the middle Euphrates region. At the later stage of the PPNB phase, saddle querns became the most popular lower grinding-tools in the middle Euphrates region.

At the later stage of the PPNB phase, two sites, Ghoraifé and Tell Ramad in the Damascus Basin appeared roughly at the same time. Both sites were situated near the lake of that time. From both sites, saddle querns have not been reported as in the case of Tell Aswad. In the Damascus Basin, *open-querns* continued to be used at this stage of the PPNB phase. From the succeeding phase, no sites in the Damascus Basin are known.

From the late PPNB phase to the early pottery Neolithic, large settlements began to appear in the coastal region of the Northern Levant. Examples of these settlements are Ras Shamra and Byblos. These settlements continued to the historical age, even to the present. In the earliest pottery Neolithic layer of Byblos and Ras Shamra, saddle querns were found. The appearance of saddle querns was later in the coastal region of the Northern Levant than in the middle Euphrates region, but compared with the Southern Levant, saddle querns of the coastal region of the Northern Levant appeared fairly early.

4

As stated above, the technological background for cultivation and processing of wheat was almost completed in the Northern Levant at the late stage of PPNB, or the early stage of the pottery Neolithic.

Two interesting points can be detected in the grinding-tools of the Northern Levant and those of the western Kurdistan foothills. The first are *meule-mortars*. They are seen in Zawi Chemi Shanidar and Jarmo in Iraq and Ali Kosh in Iran. In the Northern Levant, they are found in the PPNA layers of Mureybet and Cheikh Hassan. The determination of chronological relations between distant sites on the base of C14 dates is very dangerous, but based on other methods, it is impossible to determine chronological relations. It is inevitable to use the results of the C14 method. According to C14 dates *meule-mortars* appeared about 8,000 bc. and continued to be used to about 6,000 bc. not only in the western foothills of Kurdistan, but also in the middle Euphrates region. At almost the same time, *meule-mortars* began to appear in both regions.

The second are saddle querns. They are seen in such later pre-ceramic sites as Jarmo and Ali Kosh. At Ali Kosh, they are not so abundant in the *Bus Mordeh* phase, but their number increases in the *Ali Kosh* phase. At Jarmo, they appeared both in pre-ceramic and ceramic layers. They began to appear in the late PPNB phase in the Northern Levant.

The *Bus Mordeh* phase of Ali Kosh is a little earlier, but the number of saddle querns is small. So, it can be said that saddle querns began to be generally seen about 6,500 bc. in both regions.

Is it simply accidental that new types of grinding-tools came into being in the regions which are widely separated? Assemblages and technology of chipped stone industries are very different in both regions. The first appearance of pottery is roughly contemporary in both regions. However, the features of the earliest pottery are very different too.

During the PPNB phase, people used many materials from long distances to make their tools at each site. This aspect means that a trading network between sites covering vast areas existed at that time. If so, not only materials, but also ideas such as techniques of cultivation might have soon diffused to vast areas through this network. Once a technique is invented at one site, it is easily distributed to areas of similar environments and subsistence systems.

Cultivated plants and domesticated animals were different in each area. Techniques and forms of stone tools and pottery are different, too. Basic ideas were accepted and transformed by the environment and cultural tradition of each region respectively.

Was an agricultural society established at the PPNB phase? This is questionable. As pointed out by many scholars, many settlements were abandoned at the end of the PPNB phase throughout the Levant. Climatic change is one but not the only reason. Large settlements of PPNB were located at contact positions between the plateau and the alluvial plain. It is the best location to subsist mainly on agriculture and domestication, and subsidiarily on hunting, gathering or fishing. During the pottery Neolithic phase, large settlements were located in regions of a homogenous environment, in the midst of a plain. This environment, it is very suitable for cultivation but not for hunting, gathering or fishing. It is the best location for agriculture. The large settlements which began to be settled at the pottery Neolithic phase continue to be settled to this day. This shows that people of the pottery Neolithic phase selected the location of their settlement mainly in consideration of agriculture.

It can be said that although the foundation for agriculture was formed during the PPNB phase, a genuine agricultural society did not come into being and that if it was established at the PPNB phase, the settlements of that time would not have been abandoned. It is during the early pottery Neolithic phase in the Northern Levant that a genuine agricultural society was established.

Society at each phase selects the best location for its respective subsistence. At Natufian,

the best location is a highly complex region of small scope. It is the Mediterranean zone of the Southern Levant. At PPNB, the best location is the region contacting two different environmental niches and of large scope. It is transitional from Natufian to a genuine agricultural society, namely the middle Euphrates region. During the pottery Neolithic, the best location is a region in a homogenous and vast environment. It is the coastal zone of the Northern Levant. There are no regions to fit every society of each phase.

The paths to a genuine agricultural society are not straight, but twist and turn.